



# 中高生とともに差別と闘う

## 『人権子ども塾』という取り組み

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



### 「人権子ども塾」という取り組み

さて、何から書けばいいでしょう。あまりにも書きたいことがありすぎて、まだ自分のなかで十分整理がつけられていません。

昨春から、塾を始めました。これが、なかなかおもしろいので。塾といっても、学習塾ではありません。人権の塾、「人権子ども塾」です。毎月かかるような費用はありません。人権について突っ込んで学びたいという中高生を対象に、月に一〜二回集めて、あれやこれやと語らいます。

来ている子どもたちは基本的に、人権を語り合う中学生交流集會に参加していた子たちです。この中学生集會は四月はじまりで、夏には本大会を開催して解散となります。つまり夏以降半年以上は、各学校の取り組みに委ねられることになるわけです。そこに不十分さを感じ、声をかけられる少人数のメンバーでスタートさせたのが、「人権子ども塾」です。これがなかなかおもしろいのです。

私が話することもあったのですが、それ以上に企画したかったのは、学校ではなかなかできない、人権活動に取り組んでいたり、人権問題にかかわっていたりする「ひと」とたちの出会いでした。これはずっと以前から思いつけてきたことですが、中学時代はある程度一生懸命に取り組んでいても、卒業と同時に自然消滅してしまうような感覚。卒業してからも、自分

なりのフィールドを持ち、そこでそれまでの学びを積み上げてくれば、人権を推進していく人材となっていくのでしようが、まずそのフィールドとの出会いがない。だから自然と、貴重な人材を手放してしまうような感覚でした。

学級担任でもしていれば、毎日のように人権をテーマに話もできるのですが、そんなこともできなくなりました。でも仮に学級担任をしていても、一年ですべてを網羅するような人権学習の時間は、なかなか確保できません。ましてや、先に述べたような出会いを、思う存分提供することは無理です。やはり、数年かけて取り組みを積み重ねないと、人権学習の核心について学び取ることは難しいように思います。また、それだけやり込まないと、大人になっても人権を推進し、共に取り組んでくれる仲間のような人材とはなり得ないように思うのです。

昨年八月、中学生集會が終わった夏以降、どんな取り組みをしてきたのか、紹介していこうと思います。

### 八月七日原爆朗読劇

文学書道館で開催された、「原爆朗読劇」に参加しました。ご存じの方もおいでかもしれません。これはもとは、女優の渡辺美佐子さんや山口果林さんらが十二年間にわたって上演してきた「夏の雲は忘れない」を引き継いだ取り組みです。

臨場感のあるピアノ演奏に合作して、原爆当時のスライドが投影され、朗読がされていきます。子どもたちの眼は釘づけとなります。この類の会に参加する多くは、年配の方です。そこに若い中高生がいると、やはり目を引きます。偶然のことですが、来ていたある高校の放送部から声がかかり、インタビューを受けることにもなりました。

### 【塾生の感想…一部抜粋】

「学校の授業とは違った感覚で聴くことができました。」

「朗読会と聞いて、良い意味でひっくり返されました。話を聞くって感じより、体験しているに近い感覚でした。凄く身に染みるいい体験だったと思います!!」

「様々な写真や資料と読み手の方のリアルな演技で、その現場を本当に見ているようでした。テレビや本で知ることの出来ないようなことが知れてとても勉強になりました。」

大人の会に入っていくことは、あまりないのかもしれませんが、ですが、こういった経験が、子どもたちの経験値をグンッと伸ばしてくるのを感じました。

### 八月十九日人権フォーラム

鳴門市で開催された、「鳴門市人権地域フォーラム」に参加しました。これには共同代表の森口や、私吉成も登壇したので、子どもたちは少し気分が楽だったかと思いますが、それにしてもやはり、基

本的に大人の会ですから、多少なりとも緊張していたのではないかと思います。それでも、塾としての方針、「語り合う」という「対話」のコンセプトがあるため発言を求めますが、そこでも一生懸命に、飾らない自分の言葉で自らの思いを語っていきます。それが、参加している大人にとっても良かったように思います。

考えてみれば、中学生集會は中学生の会です。大人もたまに発言することはありますが、そのときの中学生の関心たるや、興味津々です。大人が何を言うんだろう、どんなこと言うんだろう、と。

逆に大人の会で中高生がしゃべれば、いくら何でも大人も中途半端に聞くことはできません。なかには、「子どもの言うことだから」と、斜に構える方もおられるかもしれませんが、それでも聞いていくうちに、背筋が伸びていくというか、新鮮な気持ちがいよいよ出てきていたように思います。

つまり、子どもと大人が混ざってそれぞれの思いや考えを語り合っている、聞き合う場って、思う以上ないのです。子どもにすれば、話を聞く大人は親や先生くらいです。大人にすれば、基本的に我が子以外の子どもから話を聞くようなことなんてありません。そういう意味において、こども塾自体、またこども塾が活動すること自体の持つ意味は、大きいように思うのです。

(つづく)